

対談・『国境の南、太陽の西』 (VI)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008085

対談・『国境の南、太陽の西』(VI)

酒井英行
高野圭子

VI 「国境の南」／「太陽の西」

酒井 では、六章の「国境の南」／「太陽の西」についてですが、これは、題名の意味を考えるとということにもなるわけですが、必ずしも文学作品では、題名と作品内容とがぴったり一致しているわけではありません。たとえば、漱石の『こころ』だって、人間の心について書いてあるのだからということとはわかるにしても、その具体相まではわかりませんね。作品内容を具体的に示しているものより、象徴的な題名のほうが多いですね。ですから、作品の題名と、そんなにつき合うこともないんですけども。この作品の場合は、「国境の南」というのは、ナット・キング・コールの曲の題名でもあり、それを、始と島本さんが、作品の最初と最後で聴く、という構成になつていて、「国境の南」というのは重要な語句（概念）です。「太陽の西」というのは、島本さんが、箱根の別荘で、まるで天の声のように、「国境の

南、太陽の西」という形で、セットにして出してくるわけですね。「国境の南」と「太陽の西」というのは、この作品のキー・ワードだと考えなければならぬでしょう。「国境の南」、「太陽の西」、それぞれの語句が意味するもの、象徴するものを考えないと、『国境の南、太陽の西』という作品の本質を読み解いたことにならないので、これから考えてみたいと思うんです。「国境の南」から考えるところとして、「国境の南」っていうのは、先ず、小学校六年生のとき、島本さんの居間のソファーに並んで座って聴いた曲の題名であるわけです。島本さんは脚が悪いせいか、ソファーの上に両足をあげ、腰の下に折り込むようにして据わっていて、で、島本さんのお母さんが、何かの用事で外出していて、家には、始君と島本さんだけ、という状況をわざわざ設定しています。で、始君は島本さんの「ささやかな胸の膨らみ」を目で捉えながら、耳では、ナット・キング・コールが歌う「国境の南」を聴いているのです。視覚で捉えた、島本さんの身体的な第二次性徴のシンボルと言える胸の膨らみと、耳で聴いた「国境の南」という曲は、無関係な別々のものではないはずですね。無論、始君は、まだ小学校六年生で、「国境の南」の英語の歌詞、曲の意味がわかるわけじゃないんだけど、でも、何となく、ぼんやりと、島本さんの胸の膨らみに通底している「国境の南」の意味、象徴するものを感じ取っているのですね。このように、村上春樹は、『国境の南、太陽の西』を書き出しているのです、この辺りから考えていきたいと思えます。ただ、島本さんは、大きくなつて、英語の歌詞を読んでみて、「すぐぐがっかりしたわ、ただのメキシコについての歌なんだから」と言っていますが……。

高野

そうですね。冒頭のところでは、「もちろんナット・キング・コールはメキシコについて歌っていたのだ。でもその当時、僕にはそんなことはわからなかった。国境の南という言葉には何か不思議な響きがあると感じていただけだった。その曲を聴くたびにいつも、国境の南にはいったい何があるんだろうと思つた。目を開けると、島本さんはまだスカートの上で指を動かしていた。体の奥の方に僕は微かな甘い疼きを感じた。」って書いていますね。

酒井　　ということは、子どものときも、曲の意味はわからなかったけれど、メキシコについて歌っていたって、始君は、言っているわけですね。

高野　　これは、……、大人になってからの回想です。

酒井　　大人になってからの、回想ですよ。

高野　　はい、子どものときは、いったい何のことなのかな、って。

酒井　　サウス・オブ・ザ・ボーダー・ダウン・メキシコ・ウェイ、という歌詞が聴き取れたかどうかさえわからないわけですから。

高野　　はい。

酒井　　で、ですね、箱根の別荘でもういつべん聴くとき、今のことをより明確にしますね。箱根の別荘で島本さんと、二十何年ぶりに聴くときに、ナット・キング・コールは、……

高野　　箱根の別荘では、島本さんが言うんですね。『実をいうと、子供の頃このレコードを聴きながら、僕は国境の南にはいったい何があるんだろうといつも不思議に思っていたんだ』と僕は言った。『私もよ』と島本さんは言った。『大きくなってから英語の歌詞を読んでみて、すごくがっかりしたわ。ただのメキシコの歌なんだから。国境の南にはもつとすごいものがあるんじゃないかと思っていたの』『たとえばどんなものが？』島本さんは髪を後ろにまわして軽く束ねていた。『わからないわ。何かとても綺麗で、大きくて、柔らかいもの』と書かれています。

酒井　　いうことはですね、気になるのは、子どものとき、歌詞の意味がわからなかったのはいいとして、大人になって、英語の歌詞がわかるようになってみたら、この「国境の南」っていうのは、ただのメキシコの歌だったので、がっかりした、って言っているところですけど、……。この「国境の南」っていう曲は、歌われている場所自体は、アメ

リカから見ての、国境の南、メキシコであることは確かですが、しかし、「国境の南」という曲全体が、「メキシコの歌」というのは的外れな解釈ですね。「国境の南」の歌詞の内容はそんなものではないですよ。ある男が、お祭りの日に浮かれちゃって、みんなハイな気分になっていて、絵の中にいるような、美しい一人の女に恋をして、でも、男はその女を捨てちゃう。で、捨てられた女は、失意のもと、メキシコへ、帰ってしまう。

高野 帰ったんじゃないかって、あの、男の方がメキシコに来て、……

酒井 あ、そうだね。

高野 男の方が、メキシコに来て、そこでお祭りをやっていて、綺麗な女と出逢って。

酒井 メキシコに行つて、そこではお祭りが催されていて、みんな浮かれていて、その勢いで、女に恋をして。

高野 それで、男は帰っちゃう。

酒井 男が帰っちゃうんだね。この恋は特別なものだ、絶対的な恋だと思えなかったから、別れて、……。たぶん、勢いで、浮かれて好きになっただけで、絶対的な、かけがえの無い存在とは思えなかったんでしょね。

高野 それは、そうだと思います。ちよつと、旅行で、遊びに行つて、……。あの、旅先の、行きずりの女っていう感じですかね。

酒井 サウス・オブ・ザ・ボーダーだから、アメリカ人からすれば、国境の南が、メキシコを意味するのは確かだけど、「国境の南」は、別にメキシコについて歌っているわけではなくて。

高野 はい。

酒井 これは、明らかに、恋愛関係、愛の機微というか、そういうものを歌っていて。

高野 ええ。

酒井

ある男が、旅先、つまり、メキシコで、お祭り騒ぎに浮かれて、ふと、美しい女に恋をするけども、無論、その恋は、一時的なものであり、絶対的な女性とも思えないから、お祭りが終ると、男は女を捨てて、メキシコを去ってしまう。だけど、男は、その女が恋しくなつて、再びメキシコにやってくると、そこでは、かつて愛した女は、別の男と結婚式を挙げていて、彼女の結婚を告げる教会の鐘の音は、まるで、その男に、おまえはメキシコ、国境の南に留まっていたはいけないと、言っているように鳴っていた、っていうことで。

高野

はい。

酒井

だから、ただのメキシコの歌だっていうところに、始の語りの韜晦っていうか、隠蔽があつて……。案外、この「国境の南」っていう曲は、「国境の南、太陽の西」の島本さんと始との性愛関係の下敷きであるような、その原型になっているようなところがあるのでは。というのは、この「国境の南」を聴きながら、島本さんがスカートの格子柄の膝の上をなぞるとき、その指の動きを見ながら、始は体の奥で甘い疼きを感じていて。さっき言った、お母さんがいなくて二人つきりだつていう設定もあるし、島本さんの胸の膨らみを、確実に始の目は捉えているわけで。ここが、さっきの歌でいえば、男が女に惹かれて、っていう、……。けども、小学校が終ると同時に、捨てたわけじゃないけど、離れ離れになつちやつて。

高野

そうですね。

酒井

で、それから二十何年後、「甘い疼き」を感じた島本さんを箱根の別荘で求めてみたら、島本さんは、……。さっきは、多義的に島本さんを捉えていましたが、案外、島本さんは幽霊になつていて（笑）、現実には、存在しなかったのかも知れないわけで、……。この「国境の南」っていうのは、始君と島本さんのことを歌っているような要素もあつて。決して、メキシコのことを歌っているわけじゃないのに、始の語りが、その、……。島本さんの口を通して、

ただのメキシコの歌で、がっかりしたって、言わせちゃっているっていうのは、……

高野 ええ。

酒井 隠蔽しているんでしょうかね。隠蔽、というか、韜晦、……

高野 はい、わざと、笑い話にしちゃっているようなところがあると思います。確かに、「国境の南にはもつとすごいものがあるんじゃないかと思っていたの」って、島本さんが言って、「たとえばどんなものが？」って始が聞くと、「何かとても綺麗で、大きくて、柔らかいもの」「それは食べることが出来るものかな」なんて、二人で、子どもみたいに言い合って、ナゾナゾみたいな感じに、しっちゃっていますよね。

酒井 うん。

高野 でも、英語で言うと、サウス・オブ・ザ・ボーダー、……、ボーダーっていうのは、境界っていう意味で、何かを区切る、分ける、っていうことだし、そこを越えるっていうことの意味も、考えさせられます。しかも、南っていうのが、……

酒井 「国境の南」っていうのは、境界線の南という静止した場所を意味しているのではなくて、越境して行く、南に越えて行くっていう、……

高野 そうだと思えます。越えて行くという行為があつて、そして、そこで出逢うっていう。しかも、それが、南へ、っていうところが、色々と含意していると思うんです。あの、北と南で言えば、南は、下方ですよ。降りて行く、くだって行くというイメージが付与されていると、考えることができます。ですから、そこには、もつと言うと、男／女の関係性、権力構造をも重ねられるのではないかと、私は思いました。それが、でも、春樹は、ただのメキシコの歌なんだよね、って、始にも島本さんにも、言わせていて（笑）。ここにも、読者をかく乱、惑乱させようと

しているのか、わざとミスリードさせるような、そんな作者の意図を感じます。

酒井 二人で、「国境の南」が含意するものを当てっこするっていうか、クイズのようにして、触ることができるとか、食べることができるとか言い合いますね。箱根の別荘で、二人で、もう一度、「国境の南」という曲を聴きながら、子どものころと今現在とを行き来して、「国境の南」という言葉が含意するものに接近していくのですね。島本さんの指がスカートの格子柄をゆっくりとなぞることで醸成される神秘的なものに焦点化していく。「国境の南」っていうのは、やっぱり、女性の性的身体っていうもの、男から、始からすれば、未知な部分というものを意味している。

高野 ええ。性的な意味合いがあります。

酒井 さっきの、歌の歌詞から見ても、……

高野 はい。それから、「国境の南」「サウス・オブ・ザ・ボーダー」という言葉からも、……

酒井 それは、南っていうことからですか？

高野 そうですね、南っていう、……

酒井 その、たとえば、越えてはならない一線を、男女の関係を越えちゃうっていうような、……

高野 えーと、ボーダーっていうのは、……

酒井 たとえば、島本さんの居間で、「国境の南」を聴いていたときで考えれば、まだ十二歳の少年、少女の間にある境界線、始君が語っていたように、この年頃の男の子と女の子が親しくしていると、冷やかされる、……

高野 はい。

酒井 昔のように、男女七歳にして席を同じうせず、みたいなことはないにしてもね。

高野 ええ（笑）。

酒井 線は引かれていないにしても、男女はあまり近づいたりしてはいけないような、たぶん、国境があつて、そこを、この二人は、越えちゃうんだと思うんだけど。

高野 そうですね。

酒井 ナット・キング・コールの「国境の南」を聴きながら、スカートの格子柄を指でなぞる島本さんと、それを見て、体の奥の方に、甘い疼きを感じた始つていうのは、あきらかに、越えてはいけない線を越えて、性的領域に入つていつているつていうことだと思ふんですね。

高野 はい。

酒井 その「国境の南」が、性的な、……、これは、まあ、始の視点、語りですから、男性にとつての、女性的身体、その不可思議さと甘やかさ、つていうか、……

高野 はい、はい。未知なるもので。

酒井 そうですね。未知なものに対する憧れ、何があるんだろうつていう関心。始が、十二歳でありながら、「国境の南」つていう言葉には、何か不思議な響きがあると感じていたつて言つて、いったい何があるんだろうと思つたつていうのは、あきらかに、女性の性的身体に対する思いだと思ふんですね。

高野 ええ。島本さんが、その未知の場所へ、境界の向こう側へ、自分を連れて行つてくれるような、誘いこむような存在として、始は感じていると思います。大人になつてから登場する島本さんも、「私もあのとき抱かれましたと思つたのよ」つて、言っていますよね。そういう女性の身体自体、エロスというか、そういうものが、国境の南に存在する、もしくは、そのものなんだろうつて読めます。それに、北の国よりは、南にある国のほうが、甘い花の香りかなんかしそうだし（笑）。なんとなく、暖かくて、開放的で、果物がなつていてつていうふうな、甘美なイメージが、

酒井 それはそうですね。漱石の『幻影の盾』っていう作品でも、恋する男女が、色とりどりの綺麗な花が咲いている南の国に行つて、そこで愛を深めるっていうふうになっています。

高野 はい。

酒井 イメージではないのかもしれませんが、南の国っていうのが、やっぱり、恋愛の甘美さっていうことで、……、南でなければ駄目っていう感じがしますね。

高野 シビアな大人の恋愛、っていうのではなく、憧れとか快樂っていうと、やっぱり、南の方がしっくり来る感じですね。

酒井 うん。

高野 そして、小学校のときの身体的な接触という意味では、ほんの十秒間、手を繋いだだけだったけれども、ほんとに、二人にとって、お互いが、濃密なもので結ばれていて、……。島本さんが、始君に、「唯一の友だちだったのよ」って言いますが、その、たった一人、お互いの体内の奥に秘められているようなものを、共有した相手なわけですよ。だから、その友だちっていう言葉が、含んでいる意味合は、ただの友だちとは違っているはずですよ。確かに、友だちとしか言いようがない関係なんだけど、そこを溢れ出してしまうっていうか、その裏側とか暗がりとか、そういうところがあつて、そこには密やかな何か、しまわれている。春樹は、二人で聴いていた曲が、「国境の南」であるとか、そのときの始の記憶を、克明に描くことによつて、ヘテロにとつて、たとえ友だちとしか呼べない相手であつても、絶対に避けることのできない、性的なものを、その甘やかさをも含めて、描いていると思います。

酒井 ですから、触れ合わないまま、自分のすぐ隣に座つて、指でスカートをなぞつてのを見て、甘い疼きを感じた

わけですが、そのより強度なものっていうか、島本さんと十秒間手を握るっていう、身体的接触が設定されていて。

高野 ええ。

酒井 「国境の南」への憧れの、ひとつの実現と言えるとありますが、始も、島本さんと手を握り合ったというのが、すごく大切なものに思えて、……。

高野 はい。

酒井 そのとき、始は、自分にとって大切な未知なるもの的一端に確実に触れているわけで、「僕はいつかその場所に行くことになるだろう、その事実は僕の息を詰まらせ、胸を震わせた。」という地平に連れ出されているのです。ストーリーから言えば、このときの予感、箱根の別荘、最後のところで、実現することになるんですけど。たったの十秒間、手を握り合うという、やんわりとした性愛関係、その先にあるはずのもっと生々しい性的関係というものを、現実に実現することへの憧れと同時に怖さというのか、……

高野 ええ。

酒井 そのときめきと怖さを、始は感じている。「国境の南」っていうのは、男性にとつての、女性の性的身体が持つ未知性・不可思議さを象徴していて、始がそれに憧れと怖れを抱いている、というのでよいと思うのですが。「国境の南」で、もうひとつ考えなければならぬのが、そこが「たぶんの多い国」だという点です。箱根の別荘に行つて、「国境の南」を二人で聴くところで、「国境の南」が「たぶん」でしか語れない場所・概念であることを、島本さんが教えます。

高野 はい。

酒井 「そこはたぶんの多い国なの」と、島本さんが言いますね。

高野 言います。

酒井 さっきの、女性の性的身体の未知性・不可思議さの象徴としての「国境の南」と、「たぶんの多い国」であるって

うのは重なるでしょうか？ 不確定性・曖昧さを表わす「たぶん」……。

高野 そうですね。「たぶん」と言うことで、いくらでも、幻想とか憧憬とか、曖昧な甘さの中に帰結してしまえるということなのでしょいか。たとえば、女性の身体にしても、性的な快楽にしても、いくらでも、憧憬として、妄想の中で、描くことはできますよね。欲望して、思い描くならば、とつても大きくて、柔らかくつて、つていうふうな、そういう茫漠としていて、たぶん、としか言いようがないもので有り続けることが、できます。でも、それが、現実の、実際の生身の実体と同一かという、それは、そうではない。重さとか熱とか、あとは苦痛とか悔恨とか、そういうものも共にあるはずなので、憧憬の中のそれとは、びつたりとは重ならない。常にズレがある。だから、決して、そこには辿り着けないとも言えるんじゃないでしょうか。ここが、「国境の南」だ、やつとたどり着いた、つて思つても、それは、たぶんここがそうだ、たぶん、たぶん……、としか言いようがないんだろうと思います。前の章で、話した、男／女の不可能性ということ、同じようになってしまいますけど。

酒井 「たぶんの多い国」というのが、性的な何かとして提示されていることは、その言葉が出てくる直前の、「たぶん触れることはできると思う」という言い方、その直後の、「僕は手を伸ばして、背もたれの上にある彼女の指に触れた。彼女の体に触れるのは本当に久しぶりのことだった。」つていう身体の触れ合いから見ても疑いがないと思います。しかし、その「国境の南」は、高野さんが言つたように、不確実性に満ちていて、決して到達できない、確信が持てない、……。

高野 触っているんだけど、でも、たぶん、としか言いようがないことだと思つた。これが本当の女性なん

だとか、これが本当の快樂なんだとか、誰にも確定できないし、たとえ実感しても、それを他者と共有することができない以上、これがそうですよ、とは、誰も定義することはできないだろうと思います。だから、たぶん、としか言えない。

酒井

そのことをちよつとずらせば、結局、島本さんという女性が、目の前にいたり、石川県で体に触れたりしても、たぶん、島本さんだろう、としか言いようがない、という存在の不確かさにも重なりますね。

高野

そうです。たぶん、としか言いようがないので、……

酒井

島本さんという女性存在そのものが、「たぶんの多い」人ということで、現実に存在していたのか、存在していなかったのか、わからないわけだし、……

高野

はい。

酒井

それで、「国境の南」は、まあ、わかったことにして（笑）、話を転換したいと思います。島本さんは、セットにするように、「国境の南、太陽の西」って言いますね。呪文を唱えているわけじゃないんでしょうけど。「太陽の西」というのは、始にしても、読者にしてもね唐突なんです。この「太陽の西」なんていう曲は、まったく無いから、島本さんの造語なんでしょうが、なぜ、対になるのか、……。南と西は方角ですから、セットにされていいとして、国境と太陽というのは、対にはならないですね。島本さんと始は、今、箱根の別荘で、「国境の南」を聴きながら、二人で「国境の南」を話題にしている、これは、まあ、小学校六年の時以来の、二人の共通のコードになるわけだけど。「太陽の西」は、それと結びつけられ唐突に出てくる。しかも、そのとき、島本さんは、「太陽の西」という言葉そのものが言いたいわけじゃなくて、「ヒステリア・シベリアナ」という病気のことは聞いたことがある？」って、むしろ、こちらが言いたいわけでしょうからね。

高野 でも、題名になっていますよね。たった一カ所、ここだけにしか出てこないのに、春樹は題名にしているんですね。

酒井 ああ。

高野 先生は、セット、対ではないって、おっしゃいましたけど、でも、見かたによつては、そうでもないんじゃないかと、思うんですけど。あの、「国境の南」っていうのは、上から下へっていう、そういう縦軸っていうか、下方へ向う、垂直への移動ですよ。それは、よく春樹が、井戸のことを物語に書きますけど、それは、意識下とか、時間や、記憶の内奥に向かつていくようなとき、よく井戸の話を書きますよね。

酒井 うん。

高野 だからか、私は、春樹に対して、垂直に下りていくような、感覚の人だなんて感じていたんですけど。それに対して、「太陽の西」っていうのは、逆に、垂直に対して、……

酒井 横だね、……

高野 横ですよ。空間っていうか。

酒井 うん。

高野 それが、しかも、東から上って西に沈む太陽の、その西、っていうことなので。

酒井 うん。

高野 無限に、西へ向かつて行くっていうような。

酒井 そうだね。

高野 茫漠とした、終りの無い、イメージがあつて。もちろん、下方に向かつて行く時も、終りはないんですけど。その、「国境の南」にも、終点はなくて、何処までいっても、「国境の南」なわけですよ。一つの国境、ボーダーがあつて、

それを越えて行って、その南へって言うことですから。

酒井 うん。

高野 「太陽の西」って言うのは、場所があるって、島本さんが言っていますよね。「太陽の西」っていう、空間の横の広がりがどこまでも続いている中で、「太陽の西」っていう場所がある、そこへ向かってただただ行く、っていうイメージは、「国境の南」と、ある意味、対応していると、言えるんじゃないかと、思うんですけど。

酒井 場所って言うのは、島本さんが言うんだっけ？

高野 はい。「国境の南、太陽の西」と彼女は言った。『なんだい、その太陽の西って言うのは？』『そういう場所があるのよ』と彼女は言った。という話りの後、「ヒステリア・シベリアナ」の話をします。

酒井 ああ、……。ということは、「太陽の西」って言うのは、空間だから、そういう場所があるって言えるわけで。だけど、島本さんは、そういう場所に、住む人が、ヒステリア・シベリアナという病気に罹ると言うことを言っているのよ、その場所自体には、あまり、意味が無いのか、……

高野 そこに住んでいるのではなく、その場所を指していくんですよね。「太陽の西」に向けて、歩いていって、……

酒井 ああ、はい。シベリアに住んでいる農夫がその病気に罹ったら、「太陽の西」を指して歩き出す、鋤を捨てて。

高野 はい。何もかも捨てて。

酒井 では、この場合、太陽というものが意味するものは、……。シベリアの荒野に農夫が一人で住んでいて、見渡す限り周りにはなにもない、西も東も、南も北も、地平線が見えていて、そこに太陽が昇ってくるわけですね。何もなく、地平線が見えているところで、東から太陽が昇ってきて、当然、その農夫は、太陽を目で追っかけるというか、太陽しか見えないというか。

高野 はい。

酒井 この太陽しか見えない、という、太陽が意味する、象徴するものという、いきなりですけど(笑)、島本さんでいいんですかね？ 要するに、島本さんを追っかけて、……。ここで、島本さんが、ヒステリア・シベリアナっていう病気のことを聞いたことがある？ って言って、「ねえ、想像してみて。あなたは農夫で、……」って、もう、一般論じゃなくて、いきなり、始を農夫だと決め付けて、ヒステリア・シベリアナという病気に罹っているのも始のこととしていますよね。ここは、だから、始君が陥っている状況を説明しているときか思えないわけだから。

高野 ええ。

酒井 太陽が象徴しているのは、島本さん。ですから、島本さんという幻影を、始は、他の何も見ずに、毎日毎日追っかけていたっていうことを言っている、……

高野 でも、「太陽を毎日毎日繰り返し返して見ているうちに、あなたの中で何かがぶつんと切れて死んでしまうの。」って書かれていますよね。

酒井 それは、どの段階の始のことを言っているのですかね？ 石川県に島本さんと行ってから、島本さんの幻影から離れられなくなり、彼女のことを考え始めると、「もう他の何かを考えることはできなくなった」という段階の始、つまり、島本さんの幻影に囚われてしまって、現実のリアリティーが希薄になり、日常生活がスムーズに回転していかなくなった始のあり方が、島本さんが言うところの、「あなたの中で何かがぶつんと切れて死んでしまうの」ということになるのか。つまり、箱根に行く前の段階でも、既に、ヒステリア・シベリアナに罹っているとみるのですね。それとも、箱根から帰ってきた後のことと考えるのか。島本さんという太陽を追っかけて行って、箱根の別荘で、身体的に一体化して、東京へ帰って来た後で、島本さんだと思っただけ追っかけたとき、イズミがタクシーに乗っているのを見

て、そのイズミの顔をガラス窓越しになぞるのですが、その後で、こういうふうに春樹は書いていますね。「でもイズミとのその奇妙な邂逅のあと、僕のまわりを取り囲んでいた島本さんの幻影と残響は、ゆっくりと時間をかけて薄らいでいった。目にする風景はいくらか色を取戻し、月の表面を歩いているような頼り無い感覚もだんだん治まってきたようだった。」「おそろくそれと前後して、僕の中にあつた何かが消えて、途絶えてしまったのだ。音もなく、そして決定的に。」と。始の中で、「何かがぶつんと切れて死んでしまうの」というのは、このイズミとの邂逅の後の段階のことと見るべきなのでしょう。そう考えると、その後で、店で演奏していたピアニストに向かって、もう「スター・クロスト・ラヴァーズ」は弾かなくていいよ、って言うのもよくわかるわけで、自分と島本さんを、薄幸の恋人にたとえる意識もなくなる、つまり、その曲に託していた「特別な何か」、「ある種の心持ちのようなもの」も失われてしまったのだと見ることができます。それは、箱根の別荘で、島本さんと一体化することによって、それまで理想・幻想の存在であつた島本さんが、始のなかから失われてしまったということになりますね。シベリアの農夫が、自分のなかで何かが死んでしまつてから、地面に鋤を放り出して、太陽の西に向かって歩き出すことと対応するわけですかね？ いずれにせよ、太陽というのは、島本さんということの良いのですかね？ 結局、始が、島本さんという太陽を追つかけているうちに、すべてが死に絶えてしまつて、鋤が何を意味するか、……、仕事・経営していた店、そして、有紀子と共にする日常生活まで捨てて置くということなのか、……、始が、鋤という仕事の手段を捨てて、歩き出すっていう。

高野 私は、太陽が島本さんを、……、太陽と島本さんっていうのは、ちょっと、なんだか、イメージとして重ならないような気がしますね。

酒井 島本さんというと、月とか夜のイメージですかね、……

高野 そうですね、……

酒井 そこは、わかりますよ。島本さんは、初めて店に来たとき、ブルーの服を着ていて、小さいときから、青い色の服を着ていたりして。それに、島本さんは、どうしても昼というイメージではなくて、死者のイメージを引きずって、幽霊とも重なるから。

高野 はい。

酒井 太陽のように、明るく輝くようなイメージとは反対な女性ですね。どっちかっていうと月のような存在……。

高野 ええ。島本さんが、もしいるとしたら、やっぱり「太陽の西」にいるんだろうとは、思うんです。だから、「太陽の西」には、太陽がない、とするならば、そこは、闇、だから。太陽のない世界なので、そこに、島本さんがいるのかもしれないな、とは思いますがね。

酒井 太陽のない「太陽の西」にいる島本さんが象徴するものが、闇、死の世界だというのは領けますね。石川県の川に行ったときに、「まるで世界の果てまで来てしまったような荒涼とした情景」の中で、島本さんは、「紙のように真っ白」な顔になり、「身動きひとつ」しなくなり、その島本さんの瞳を始が覗き込むと、「瞳の奥は死そのもののように暗く冷たかった」と書かれていますね。そして、あの世をイメージさせる、冬の石川県の川べりの風景を眺めながら、始は、自分はいつか、これと同じ光景に出会うだろう、という予感に囚われますね。

高野 ええ。

酒井 他の場面でも、始は、島本さんのなかに、死の世界を見えていますよね。

高野 はい。

酒井 だから、「太陽の西」というのは、死の世界と考えるほかないでしょうかね。ヒステリア・シベリアナに雇った農夫は、

「太陽の西」に向けて歩き続けて、そのまま地面に倒れて死ぬんだって言っているように、「太陽の西」には死しかな
いのでしょうか。「太陽の西」に、太陽があるわけではないから、そこは何にも無い世界で、石川県の冬の風景に囲まれて、
島本さんの瞳の中を覗き込んで見た、真っ暗な死の世界。

高野 ええ。

酒井 ですから、「それは国境の南とは少し違ったところなのよ」って、島本さんがわざわざ言うように、「国境の南」が、
ある意味、生と性に通じる動的な世界であるのに対して、「太陽の西」は、明らかに、静止した死のイメージの世界で、
……

高野 はい。そう思います。しかも、それは、東から西へ、平行に移動するっていうことで、ただただ横に横に、進んで、
移動して行く。そうやって生きて行くっていう、そういうイメージを、私は持ちました。命あるものは、結局、太陽
が昇って沈む、その繰り返しを見ながら、西へ西へと進んで行って、もう、ここで終わりだっていう時まで、何も無い
ところへ向かって、太陽の西へ向かって、つんのめって歩いて行くだけなんだっていう感じですよ。そして、そのイメ
ジは、島本さんが持つ、死とか闇とか、消滅とか、それと重なって。そこには、たぶんも、しばらくも、もう何も無
い、……。エクスキューズするものは何もなくて、……。

酒井 だから、太陽の西へ、西へと歩いていって、行きついた「太陽の西」って言う場所は、さっきから出ているように、
「太陽の西」に太陽はなくて、何も無い、……。で、たぶん、それは、死を意味する、それは、石川県で、島本さんの
瞳の奥に見たものであって。それは、そういうことでもいいと思うんですけど、見渡す限り地平線で、そこから上る太
陽を追っかけていっているうちに行きつくところが「太陽の西」だということ、でも、何を、始が追っかけてい
るっていう、その、何かっていうのが、……

高野 はい。

酒井 島本さんと限定せずに、もつと広義に解釈して、幻想・理想とか、子どものころのロマン的空想とか、……。店から、島本さんを送りだしたとき、外には雨が降っていて、始を、「もう一度十二の少年に戻ってしまったような気」にさせますね。子どもの頃、雨を見つめていると、「自分の体が少しずつほどけて、現実の世界から抜け落ちていくような気がしたものだ」と言っています。始には、子どもの頃からずっと、現実離脱の性癖があり、現実を見ないで、憧れとか、夢とかを追いかける傾向があつたわけですから、太陽を特に島本さんと限定しなくてもよくて、……

高野 追っかけて行くっていうか、そこへ、向かつて進んでいくしかないっていう、やむにやまれない、っていうような感じでしょうか。

酒井 太陽ということに、あまり重点を置かずに、西へ、……

高野 はい、西へ西へと、……。しかも、「太陽の西」っていう。

酒井 そこには、当然、何も無いわけだから。

高野 不毛ですよ、ほんとに。

酒井 うん。

高野 さっきの不可能性の話じゃないですけど、男と女が、本当の意味で出逢おうとしたり、生きる実感を持つとしたり、あの、始も、一生懸命、仕事したり、悩んだり、島本さんの幻影にすがったりするわけですけど、それは、やっぱり、西へ西へ、つんのめるように、ひたすら歩いていくことだったんだらうと思うんです。すごく不毛なことなんですよね、だから。そして、いつか、ぱたっと、倒れて死んでしまう。始君だけではなく、私たち、みんな。そこが、「太陽の西」かどうかともわからないところで、最後は、倒れて、大地に横たわって果てる。そういう、まあ、……。無

惨で不毛な、私たちの生きる姿の一面を、島本さんが語っているように思います。

酒井 西っていうのは、仏教的には、極楽浄土があつて、決して悪いイメージはないはずですけど、「太陽の西」っていうと、なんか、そこは、……、私の個人的なイメージかもしれないですけど、砂漠が広がっているような、草一本、木一本無い様な感じがするんだよね。

高野 はい。

酒井 「国境の南」には、花が咲き乱れ、水もあるだろうし。

高野 そういうイメージですね。

酒井 でも、「太陽の西」が喚起する世界は、なんだか、殺伐としていて、すべてのものが死に絶えているというか。

高野 ええ。

酒井 『国境の南、太陽の西』という作品のイメージというか、この作品のキー・ワードは、砂漠ですね。草も花も、鳥も虫も、みんな死に絶える、あとには砂漠だけが残る、本当に生きているのは砂漠だけだつて。

高野 高校時代の友人が、あの、イズミのことを伝えてくれて、その後、……

酒井 そう、そう。高校時代の友人が言うのですね、そして、それをなぞるかのように、始も、有紀子に、『砂漠は生きている』っていう映画の話をして、「みんながそこで生きているんだ。でも本当に生きているのは砂漠なんだ」と言います。まあ、怖いと言えば怖いタイトルの映画だけだね。

高野 はい。安部公房の『砂の女』なんか思い出させますね。

酒井 このすべてが死に絶えている砂漠、それが「太陽の西」で、……。そこは、月の表面のような、がらんとした世界……。島本さんが箱根で消えた後の現実世界は、色の無い、無重力の月の表面のような世界で、空虚、虚無だけがあ

る世界。

高野 ええ。

酒井 それから、始のマンションがある青山あたりを、墓石の林立した場所と見ていますね。

高野 はい。

酒井 墓地のイメージで語りますよね。そういうのを、もうちょっと、押し進めると、……。墓石、石塔でさえも、たとえば、風化して、粉々になってしまったような世界が、……

高野 そうですね。そして、生きているっていうのがすごいですね。その、砂漠が、生きている、っていうのが。

酒井 そうだね。

高野 全部を飲み込んでいってしまう。そういうところがあつて、しかも、それが命を持っているなんて、……。そして、人が生きるっていうことは、ただそこを目指して進んでいるだけで、ただただ、まっしぐらに、その、生きている砂漠だけに向かつていくっていうのは、……。本当に、恐ろしいです。

酒井 「死そのもののように暗く冷たかった」島本さんの瞳の奥に通じるような、冬枯れの石川県の川べりの風景、きつといつかこの光景をどこかで目にすることになるんだと、始が感じた、という既視感の逆の体験をしますね。「死そのもののように暗く冷た」い世界に向かつて行っているのだという生の感覚。砂漠だけが生きていて、というのは、逆説的な言い方であつて、始めから死そのものの世界である砂漠には、死すらもない、そこが始や有紀子が生きていて現実世界と違ふところですね。しかし、始や有紀子にも必ず死は訪れて、砂漠に飲み込まれていくわけです。我々人間は、結局、生まれたときから、死に向かつて歩いていくほかないのですね。「太陽の西」に向かつて……。『回転木馬のデッド・ヒート』において、春樹が、我々の生の形を、「降りることも乗りがえることもできない」回転木馬の

上で、「仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげているように見える」と言っていますが、その通りで、我々は死に向かって突き進んでいる、そのことを、島本さんが、「太陽の西」に向けて歩き続けるシベリアの農夫の比喩で語っているのだと思います。もつとも、「太陽の西」に歩き出す前に、昇り沈みする太陽を見ているうちに、既に、「何かがぶつんと切れて死んで」しまっているのですが……。これは、表面的には幸せ家族を演じ続け、役割をこなすことだけで繋がっていた始と有紀子との関係性を象徴しているのですかね？ 生きた人間関係としては、既に、死んでいる。こういう関係性が、作品の最後のところに描かれている。「明日からもう一度新しい生活を始めたい」と言う始に向かって、有紀子が、「それがいいと思う」と応えますが、本当に明日は来るのか？ 本当に新しい生活は始まるのか？ 始と有紀子の遣り取りで、関係性が取り戻せたかに見えますが、次の朝、子どもを起こしに行こうと思うと、空気が抜けたみたいに力が入らなくて、……。しかも、誰かがそつと始の背中に手を置いた、っていう結末で、その「誰か」が、死者である島本さんとも考えられる書き方になっていて、結局、始は、砂漠・死の世界に飲み込まれた、とも読めますね。「太陽の西」に行けば、東へ辿り着けると思ったら、やはり、「太陽の西」にしか行けなかった、……。

高野 そうですね。行きつくところは、向かっていくところは、……

酒井 結局ね、多少、浮き沈みがあってもね、……（笑）。

高野 太陽が昇ったり沈んだりして、たまに、「国境の南」へ行ってみたり、っていうことがあったにしても、……

酒井 だから、作品の題名も、「国境の南、太陽の西」、つまり、「国境の南」が先で、「太陽の西」が後に置かれているのだと思います。「国境の南」もあるけれど、結局、「太陽の西」でしょう、っていう感じで、下に置かれている。後に置かれているもののほうが、本質的と言いますか、重要と言いますか。語句の配列から見ても。

高野 そうなのかもしれませんね。あの、たぶん、春樹が作った言葉なんですよね、「太陽の西」っていうのは。

酒井 これは踏まえたものが特にないでしょから、春樹の造語ですね。しかも、セットにして、出している。

高野 すぐ、春樹は、この言葉を大事に思っているっていうか、良い言葉を思いついたって(笑)、思っているように感じるんですけど。それを、島本さんに言わせていますし。

酒井 そうだよな。先ほど話に出っていたように、有紀子も、後半の方で、春樹の作品によく出てくる超越した女性になっていますが、島本さんもまた超越者ですね。「太陽の西」という決定的なカードを出したところで、超越者になりますね。ヒステリア・シベリアナという病氣のことを、始に教えるとき、あなたは農夫なのよ、と断定的な言い方をします。始に教え、示す超越者になっていて。結局、春樹の他の作品と同じように、やっぱり、女性が男性を導くというか、教えるというか。

高野 はい。教え手になっていますね。

酒井 そういう構造の作品になっていますね。

高野 さつきから出ているように、「太陽の西」っていう言葉の持つ、イメージの、不毛さっていうのは、もちろんあるんですけど。でも、こう、そこに向かって、立ち止まらない。もう、行くしかないっていう、そういう、「太陽の西」に向かって歩いていくんだ、っていう覚悟みたいなものも、読み取れると思うんですよ、私は。絶望だけしかない、とは感じないんですけど。

酒井 それは、作品を書いている春樹の中では、そうでしょうけど。しかし、主人公の始にしてみれば、島本さんからヒステリア・シベリアナの病氣の話を聞いて、結末のところ、やはり、体の栓が抜けたようになっちゃうわけだから。

高野 でも、きつと、また、すぐ、ぼわんとなって、違う女のことを思い出したりするんじゃないかと(笑)、思うんです。

けど。

酒井 ああ(笑)。

高野 でも、いいタイトルだと思います、この「国境の南、太陽の西」っていうのは。

酒井 さつきちよつと言った、短編集の『回転木馬のデッド・ヒート』も、題名がいいですね。誰をも追い抜かないし、誰にも追い抜かれないのに、回転木馬の上で、デッド・ヒートを繰り返しているような我々の人生。我々の生きている姿を、「回転木馬のデッド・ヒート」というイメージで表象する春樹のセンスは、すばらしいと思います。「どこにも行かないし、降りることも降りかえることもできない」回転木馬の上で、「仮想の敵」に向かつて、デッド・ヒートを繰り返しているような我々の生の形……。

高野 はい。いつも、何かに、追い立てられてるようで、……。

酒井 一生懸命、ばかばか乗っているんだけど、一つのところを回っているだけっていうね。繰り返すっていうイメージが、……。

高野 ええ。

酒井 「国境の南、太陽の西」の、西に、「太陽の西」に向けて、「憑かれた」ように歩き続ける、というイメージに通じていてね。太陽を追っかけて、西へ西へと歩くっていうのが、そのイメージに通じていて。

高野 はい。

酒井 「仮想の敵」に向けて、熾烈なデッド・ヒートを繰り返しているような我々の生の形を考えると、さつきから話し合ってきた、太陽が誰かとか、島本さんが幻想だとか、というのとは、それほど重要なことではないのだと思えてきます。砂漠のような世界に生きていて、必ず、死は訪れる、死だけが本質的なことである、と春樹は、『国境の南、太陽

の西』で言っているように思えます。人間の生命はいつか息絶えて、生きていけると言えるのは砂漠だけ。「本当に生きているのは砂漠」だけ、という砂漠の中に、味気ない、つかの間の生を営んでいて、すぐに死絶えてしまい、砂漠に吸収されてしまう、結局、生きているのは砂漠だけ。我々は、その死の世界、「太陽の西」に向けて、デッド・ヒートを繰り返しながら、行き急いでいるのですね。春樹がこのようなことを言いたかったのだとしますと、作品世界を生きたる主人公は始であり、島本さんは、超越者として、始に生きていることの意味を教える役割を背負わされている人物ですね。島本さんに、ヒステリア・シベリアナという病気に ついて語らせ、始の生の形を、「太陽の西」に向けて、「憑かれたように」歩き続けている、と教えずとところがねこの作品の眼目だと思います。どんな人間にも、憧れや夢があり、幸せを追い求め続けるわけですが、そうして生きている姿を、超越者の視点から見れば、「太陽の西」、死の世界へ向けてねデッド・ヒートを繰り返しながら、歩き続けているに過ぎない、ということ、この作品で春樹は表現している。「本当に生きているのは砂漠なんだ」と言われると、虚しくなるっていうよりは、まあ、清しい感じすらしますね。

高野 そうですね。「国境の南」で、ふわふわと、何があるのかしら？ たぶん、何かあるだろうって、ただ、思っているよりは、こう、あの、腹をくくるといふか、それでも行くっていうか、それしかないっていう、覚悟が決まってくるような気がします(笑)。

酒井 そうだね(笑)。